

(案) 令和7年度 第1回清水区地域包括支援センター運営部会 会議録

- 1 開催日時 令和7年7月31日(木) 14時00分～15時50分
- 2 場 所 清水保健福祉センター 3階 視聴覚室
- 3 出席者 (委員) 杉山委員、丸山委員、澳塩委員、小林委員、金田委員、
望月委員、佐々木委員、大石委員
(地域包括支援センター) 蒲原由比、有度、松原、飯田庵原
高部、岡船越、港南
両河内、興津川、港北
- 4 事務局 清水区役所清水福祉事務所高齢介護課 高齢者福祉係
地域包括ケア推進課
- 5 傍聴者 0人
- 6 地域包括支援センターの令和7年度活動の進捗状況報告及び意見交換

(1) 蒲原由比地域包括支援センター(以下、「蒲原由比包括」)

蒲原由比包括：人口減少や若い世代の減少、高齢化率が伸び続けているという時代環境の変化もあり、障害や経済的困窮など複合的な課題を持った相談が増え相談時間が長くなっている。早期に相談できるように広報誌の発行や、シニアクラブでの出張相談、S型デイサービスの啓発活動に加え、地区社協開催の世代が交流する場で、チラシの配布や相談出張相談としての広報活動が続け、情報収集やケースについて話し合い、地域ケア会議で関係者を巻き込みながら実施していく。

認知症対策について、生涯学習交流館と共同しながら、仕事が終わった若い世代の高齢者が地域活動に積極的に参加できるような目的で、勉強会を計画している。

自立支援プラン型個別ケア会議での地域課題であがっているのは、当事者会や移動手段であるため、検討していく。

丸山委員：自立支援プラン型個別ケア会議からあがってきた地域課題の中で当事者会の内容を知りたい。

蒲原由比包括：介護者家族の会が昔はあったが、自然消滅した。ただし、当事者同士が集まる場は必要であるため、ケアマネジャーと相談中である。

丸 山 委 員：介護についての相談の場がないことが問題であると聞いているので、相談できる場があれば良いと思う。

望 月 委 員：担当の２地区ではそれぞれ特徴が違っていると感じている。活動の中で苦労や工夫している点はあるか。

蒲原由比包括：似ているようだが地域性が異なる。一昔前とは異なり、近所づきあいや親戚関係の強いつながりは薄れてきていることに、戸惑う高齢者が増えている。

（２）有度地域包括支援センター（以下、「有度包括」）

有 度 包 括：高齢化率は市平均と比べると少し低い地域である。ＪＲや静鉄があり交通の便はよく、草薙駅を最寄り駅とする大学が２ヶ所あり若者と交流ができる地域である。地域住民が住み慣れた地域でずっと暮らせることを目標にして活動している三つについて報告する。一つ目は、医療・介護・福祉関係者との連携強化である。包括圏域内の医師、歯科医師、薬剤師、ケアマネジャー、地域では連合自治会や地区社協、民生委員の福祉関係者と今以上に顔の見える関係を築き、高齢者支援が円滑に進むように、自宅ですっとミーティングを活用して進めていく。自然災害が多いので、防災や災害関連のテーマで、秋から冬にかけて開催予定である。

二つ目は幅広い世代に、認知症と対応についての理解を深めるために、７月５日に認知症サポーター養成講座と屋外で認知症高齢者徘徊訓練をセットにして実施して、参加者は約６０名であった。高齢者役、声掛け役を地域住民に担ってもらい、認知症高齢者の接し方の注意点や留意点の訓練を実施した。また、小学校４年生の福祉教育で認知症高齢者の接し方の授業を実施予定である。

三つ目はインフォーマルサービス促進で、地区の特性でもある若者たちの交流で、大学のサークルとも繋がりながらインフォーマルサービスを開拓していきたい。

杉山部会長：認知症高齢者徘徊訓練の参加者の年齢層や意見、感想を聞きたい。

有 度 包 括：参加者年齢は２０代から８０代で多かったのは６０代、男女比は半々だった。屋外で実施しグループを６班に分けて６ヶ所で実施。グループに必ず包括職員が１人入り進行役を担った。参加者は実際に路上を歩き、声かけ役が、認知症サポーター養成講座で学んだ声掛けを、認知症高齢者役に行った。実施時間は炎天下のため長い時間は行えず、２５分程度で終了した。

杉山部会長：大学生の参加は計画に即して実行できている。

(3) 松原地域包括支援センター（以下、「松原包括」）

松原包括：今年度から社会福祉士が1名増員となり、業務により力が入れるようになった。重点項目の一つ目は包括について、関係機関や住民への周知、二つ目は権利侵害、虐待、成年後見制度、消費者被害などの早期発見と予防の啓発、制度説明への支援、三つ目が障害支援機関・民生委員とケアマネジャーとの連携強化である。

進捗状況としては、毎月包括が発行する瓦版を用いて、地区社協企画委員会4ヶ所、民生委員児童委員協議会4ヶ所に、事例や制度の紹介を行った。また、S型デイサービスにも参加し包括のPRや認知症についての情報提供を行った。

個別ケア会議は2回開催し、1回目は40歳代の障害が疑われ自宅がごみ屋敷で透析導入が必要なケースについて、総合病院看護師長、生活保護ケースワーカー、障害者支援課、障害者相談支援機関、生活保護受給対象の通院支援を行う担当者と、支援の方向性について話しあった。2回目は60代のパーキンソン病の治療が中断しているケースで、保護観察官、保護司、生活保護ケースワーカーと非常時対応や音量問題行動に対する対応策について話し合いを行った。

圏域内ケアマネジャーの勉強会は、動物愛護センターから防犯面や対策についての講義を受けた。また毎年開催している障害者相談支援機関「わだつみ」「はーとぼる」と、圏域内のケアマネジャーとの合同勉強会は今年度も開催する。

毎月、地域福祉コーディネーターと包括職員全員との話し合いを重ねる中で、新たな買い物支援バスのルートを確認することや健康麻雀の会の立ち上げができた。主任ケアマネジャー連絡会に地域福祉コーディネーターが参加することになった。

地域福祉コーディネーターと協力し、小学校で福祉教育の講座を行い、認知症に対する理解を若年層へ深めていく。

金田委員：社会福祉士が増えたことで、権利擁護等を重点的にみられているのが良いと思う。会議では関係する多職種の参加が多いが、関係者を繋げる工夫はなにか。

松原包括：個別ケア会議1件目は、最初の相談が総合病院看護師長であった。その後に通院支援を行う担当者から助言をもらい、支援者を広げていった。年齢的に介護保険デイサービス等を繋げても利用は困難であると感じ、障害支援サービスの利用を検討するため、障害者支援相談機関である「わだつみ」「はーとぼる」に会議の出席を依頼した。

金田委員：対象者の利益に置き置いたところ、支援者が広がったことが良かった点。

望月委員：地区活動で他の地区と比べて苦勞されているところはあるか。

松原包括：特に大変ということも、不安もない。

大石委員：折戸地区は八つの自治会があり、それぞれ住んでいる属性が異なる。

杉山部会長：地域に対する先入観を持たない方が包括の活動のしやすさに繋がるのではないかと思う。

（４）飯田庵原包括支援センター（以下、「飯田庵原包括」）

飯田庵原包括：困難ケースとしては、70代の親と40代の子どもの経済的困窮があり、双方とも医療機関未受診や親の年金で生活している。子どもは障害を疑われるケースが多く、障害者支援課や障害者支援事業所と連携している。多職種との連携が増えているため、包括職員のスキルアップを目指している。困難ケース対応は、3職種のうちの2職種で対応し、役割を明確にして効率よく終結まで支援している。

二つ目は認知症サポーター養成講座を広げていく。中学1年生や民生委員に養成講座を開催する。

三つ目は、地区社協会合や民生委員会に出席し、相談があった内容から、不足の社会資源を生活支援コーディネーターや地区役員に相談をする。新型コロナウイルス蔓延時から停滞している活動を地区社協と相談し、再開または内容を変えて活動できるようにすすめていく。

小林委員：地区まつりでの高齢者に関するアンケートと結果や反応はどのようなものか。

飯田庵原：アンケートは子ども150人弱で大人は100人ほど、「認知症は知っていますか」「高齢者と一緒に住んでいますか」「認知症の人にはどんな声掛けをしていますか」という内容。10年前から同じ内容で、そのときと比べて高齢者と同居世帯が減っている。

小林委員：地区まつりにただ参加するのではなく、聞き取りを上手に行っている。

澳塩委員：資料では世帯数が100件以上増えているが、理由と年齢層はどのようなになっているか。

飯田庵原：人口は減っているが、高齢者世帯や単身世帯の増加がある。若年層の減少で、高等学校を卒業したら地区外に出ていく傾向がある。

杉山部会長：10年前からのアンケートについて分析して、地域作りに生かして欲しい。

（５）高部地域包括支援センター（以下、「高部包括」）

高部包括：ケアマネジャーから民生委員との連絡会開催の希望があり、秋の開催に向けて民生委員会長と協議中。

二つ目は包括が立ち上がった平成 17 年は 17%の高齢化率だったが、最近
は 32%と静岡市の平均より高くなっている地域である。地区社協や民生児
童委員協議会と連携を深めて、相談をきちんと受け止めて行き、連絡、報
告をしっかりと行っていく。また、民児協に参加した際、民生委員が日頃
対応している事例について検討を行ない、対応内容について共有する。

三つ目は、ボランティアの事業「お助け隊」で、ボランティアのモチベ
ーションの維持が難しい問題がある。解決方法として、個別ケア会議を開
催して、必要な回数について情報共有した、ボランティアの選出の仕方
について協議することができた。

金 田 委 員：ボランティアの活躍が目立つが、他区では継続するためにボランティ
アの有償化の議論があるようだが、検討しているか。

高 部 包 括：お助け隊は現在無償で実施している。事務局会議で、有償化の話が話題
はあがるが、地区社協や地域住民からの強い希望で無償化となっている。

佐々木委員：排他的になり、ボランティアが関わりにくい場合の支援はどうしてい
るか。

高 部 包 括：セルフネグレクトやごみ屋敷の対応については、個別に対応している。

佐々木委員：我々もわからない部分がある。大変なところは一緒である。

澳 塩 委 員：認知症サポーター養成講座を担当した時、受講生がどこかで活躍をした
いという相談がある。また、地域包括支援センターを知らない人もいるため、
包括周知を SNS で行ってみるのはどうだろうか。

高 部 包 括：SNS 活用についてはレスポンスが良く、活用を検討していきたい。

(6)岡船越地域包括支援センター（以下、「岡船越包括」）

岡船越包括：毎月開催される社協主催の会議や個人事業と各団体の勉強会などに出席
し情報発信を行っている。見守りなどの活動をしているネットワーク委員会
へ、9月に勉強会を行う。7月には地区社協と合同で小学校4年生を対象に
福祉授業を行い、小学生がS型デイサービスへの見学参加へ繋がっていく。
交流館や現役の薬局へチラシの配置をお願いする。

二つ目の介護予防自立支援は、S型デイサービスの会場でエンディングノ
ートを活用し、医療と介護の希望について考える時間を持った。半年をめど
に見直しの機会を予定している。老人会で、「家で元気に過ごすには」をテ
ーマで話をした。

適切なケアマネジメントの実施、介護予防ケアマネジメントから見えてく
る困難事例や課題をまとめて、地域住民による会議や活動の場で発信、早期
に相談できる体制を整えるため生活支援コーディネーターと協働していく。

多重問題、複合的な問題、複雑化する問題に対応できるよう、関わった実際の事例を生かして、連携機関や社会資源の一覧表を作成し、圏域内の居宅支援事業所や地域の活動団体と情報共有して、連携できる体制整備を目指す。

自宅ですっとミーティングを開催予定。

丸山委員：チラシを薬局へ配布する方法を教えてほしい。

岡船越包括：圏域のプラン型会議でアドバイザーを依頼した薬剤師の繋がりからすすめていく予定である。

佐々木委員：薬剤師会の事務局に直接連絡すれば、その圏域内薬局に配布できる。

杉山部会長：ボランティアの高齢化やボランティアを担う人材不足に対して、担い手を発掘するための方法や手段はあるか。

岡船越包括：生涯学習交流館と生活支援コーディネーターで実施したボランティアの勉強会に参加することや、地区社協の会合で介護や介護予防やボランティアの話をする予定。

望月委員：圏域内の特徴を聞きたい。

岡船越包括：共助の気持ち強い地区。ニーズに対して何ができるかを考えていて、先進的な地区と捉えている。

(7) 港南地域包括支援センター（以下、「港南包括」）

港南包括：総合相談では、多問題ケースが増え、訪問や電話など1ケースの対応に時間がかかる。特に医療機関からの退院調整において、本人の介入拒否や意向を尊重するが故に時間がかかる。退院後も不衛生で劣悪な環境下で生活することもあり、どう対応すればいいのか、日々包括内、関係機関と協議をしている。本人と面談する機会を増やし、また、病院のソーシャルワーカーなど、関係機関と密に連絡を取り合っている。

二つ目は社会資源マップを地区役員の協力を得て作成した。ある地区では、居場所づくりに力を入れ、健康麻雀を開催し男性が集えるなど工夫をした。また6月のプランナー会議では、要介護の男性について事例を検討し、外出や他者との交流が増えることで、課題解決をできることが多くあった。居場所会場までの「お誘いたい」など、移動手段も含めた検討を、生活支援コーディネーターや地区役員に提案中。

圏域の主任ケアマネジャーとの連携会議は、6月に第1回目を開催して、地域を知り繋がることを目的に、銀行、郵便局職員とお互いの業務で困っていることなど意見交換を行った。通帳やキャッシュカードを何度も紛失する方の対応に苦慮される金融機関と、ATMのテンキー配列が変わり、操作ができず利用者からケアマネジャーが呼ばれるなどの意見があった。

ATM操作は、ケアマネジャーから電話を入れることで、銀行が対応してくれるなど、ネットワークの活用で解決できることもあった。

主任ケアマネジャーが地域に視点をむけ、主体的に動いていることが、包括としては心強く感じている。

三つ目は、圏域内のグループホームと運営推進会議で、火災時の避難行動を共有し、特定の地域の方に避難時の協力依頼ができることを確認している。

また地域に向けては、小中PTAの協力を得て今後、介護者になり得る年齢層に向けた認知症サポーター養成講座を8月に開催予定。その他地区では、保健委員の広報活動に合わせ、認知症理解の啓発の協力をお願いした。その結果、気になる方の情報提供が3件寄せられた。各地区の状況に合わせ、認知症への理解を促していく。

望月委員：65歳未満の精神疾患や障害を疑われるケースの相談の増加という記述には大変動かされた。活動実績の中で、港南包括だけが令和6年度の活動訪問がいずれも件数が下がっているのはなぜか。

杉山部会長：相談件数について、令和5年度と令和6年度で約1900件位下がっている。

港南包括：総合相談記録の入力の仕方が、職員間で共有できていなかった。実感として訪問や相談の件数は減っていない。

杉山部会長：職員の入れ替わりがあるが、静岡市は総合相談の入力方法を示している。入力方法を共有していかないと、包括ごとに件数が、かなりばらつきが出てしまう。包括内で年に1回、新年度になったら見直し確認するなど、共有し合うことは大事である。

丸山委員：配置人数で、定員6名のところが7名である。採用の定着に当たっての工夫や気にしているところはあるか。

港南包括：なるべく職員1人の負担にならないように、業務自体をみんなで協力し合い、大変なことを共有すること。職員1人の業務が偏らないようにして、退職しないような雰囲気づくりを行っている。

（8）両河内地域包括支援センター（以下、「両河内包括」）

両河内包括：清水区圏域内では一番広い面積の範囲を受け持ち、人口2500人弱、高齢化率は45%を超えている。経済的な問題やフォーマルサービスが少なくまた、隣家との距離があって孤立するなど、いろいろな問題が複合的に絡まっている。相談が複雑になっている。

重点取り組みは、住み慣れた地域で自立した生活が維持できるように、フレイルの発生を予防する、フォーマルな資源とインフォーマルな資源、または既存の資源と新たに開発した資源をうまく融合させて、安心して暮らせるまちを

つくる。たとえ認知症になったとしても、住み慣れた地域で安心して暮らせるように地域全体で認知症の方を見守れる体制を構築するという三つである。

フレイル予防は、広報誌に載せることやS型デイサービスの会場で啓発を行っていく。今年度は福祉用具のサービス提供事業者や、圏域内のグループホームやデイサービスの職員に協力を求める。

資源の融合に関しては、独居の高齢者や高齢者世帯の方が、認知症になったとしても、安心して暮らせるように、圏域内の商店やガソリンスタンドの店員さんなどに認知症サポーター養成講座をすすめ、地域全体で認知症の方を見守れる体制を構築したい。また風水害や地震といった自然災害発生時、住民もケアマネジャーも困らないように、地区の防災に関する勉強会を開催する。

小 林 委 員：栄養士会歯科衛生士会でもフレイル予防の講座の講師を行うため、会員が研修を行っている。用意できる資料があるので活用してほしい。

大 石 委 員：地区特性上で苦勞していることはあるか。

両河内包括：相互共助の意識は強い一方、孤立する住民もいる。

丸 山 委 員：入退院時の支援の内容を知りたい。

両河内包括：地域の診療所と包括は連携がとれている。包括が診療所と総合病院との繋ぎを行っている。

（９）興津川地域包括支援センター（以下、「興津川包括」）

興津川包括：地域ケア会議では民生委員から、地区にある施設を知りたいという声があり、同地区内の介護老人保健施設見学およびグループワークを7月29日・8月27日に行う予定。施設職員と顔の見える関係性を築き、民生委員活動、地域支援活動に役立てることが目的である。

2番目のS型デイサービスでは、1会場に年2回の訪問を計画し消費者被害についてチラシと紙芝居にて啓発活動を行っている。包括で作成した「まるけあ手帳」をS型デイサービスの会員やスタッフに配布をして、圏域内の中のサービスを紹介するとともに、書き方は包括職員がレクチャーをして高齢者との交流を通し、高齢者の実態把握に努めている。

3番目の自宅ですっとミーティングは10月4日開催予定で、地区内のお寺で実施している介護者家族の会の協力を得ながら実施する。

杉山部会長：包括が作成した「まるけあ手帳」が見やすい。記載について包括職員がレクチャーしているとのことだが書くのを嫌がることはないか。

興津川包括：最初から全部を記載するのではなく、書きやすいところから記載するようにアナウンスをしている。

杉山部会長：全部埋めなくても、項目を知るだけでも十分な終活になる。

澳 塩 委 員：施設入所の待機者や相談は多いか。

興津川包括：老人保健施設は季節によって待機者が多い時とスムーズに入れる時がある。

特別養護老人ホームは常時待機者がいるが、スムーズに入れるときもあり、利用者の病状等によって、希望されても入れない場合もあり、時期的なもの、利用者の体調によると思われる。山側地区で、介護保険のサービスに繋がらず自分たちだけで解決したいという意識がある地区で、相談をうけたときには既に、在宅生活が困難で施設に入るレベルの方もいる。

丸 山 委 員：介護者家族者会について参加人数や参加を増やすための工夫はどのようにしているか。

興津川包括：参加人数はまちまちである。S型デイサービスや訪問時にチラシで紹介、あとは口コミで広がっている。

(10) 港北地域包括支援センター（以下、「港北包括」）

港 北 包 括：重点項目の1番目、生活支援コーディネーターと地域課題解決に向けた取り組みは、地域課題として65歳未満で脳血管疾患罹患後に、介護保険サービス利用がし難いことや、家族の中での役割の喪失があり既存の社会資源では解決できない問題に対して、地域ケア会議を実施していく。地区社協が中心となって多世代居場所活動と介護事業所を中心に障害者の地域課題を共有したい。目標としては、居場所活動に当事者が来ることや、65歳未満でも介護サービス事業所でリハビリ機能や、障害の関係機関でサービス支援が展開できるか検討したい。

2番目のチームオレンジの活動は2年前に活動が立ち上がり、チーム員のスキルアップのため、事例検討を通じて講座を実施していく

3番目の自宅ですっとミーティングは災害をテーマに行う。圏域内に移転してきた総合病院の災害時の役割を理解しつつも、自分の身は自分で守ること共有し、ケアマネジャーや介護事業所に、包括が災害時に計画しているBCPの活動を周知したい。また、平常時に備える基本的な知識の普及を行っていく。

望 月 委 員：シャドーワークの共有とはどのようなものか。

港 北 包 括：制度では本当は賄えない部分を、本来役割でない方が行っているということ。

金 田 委 員：シャドーワークは、本来の自分たちの役割を見直すことではあるが、時代の変化もあり、役割以外の要素があふれてしまった場合、どううめるのかその資源を、生活支援コーディネーターが作れるかという精査のためにも、今整備をする必要があると認識している。

港 北 包 括：ケアマネット協会で作成したパンフレットを利用して、ケアマネジャーと勉強会を予定している。

杉山部会長：新聞でも介護支援専門員の役割見直しを考えている記事があった。

金 田 委 員：全国的な流れで、行政側もケアマネジャーには本来の役割に戻す活動が行われている。

7 連絡事項

令和7年度第2回清水区地域包括支援センター運営部会の日程について、令和7年2月の木曜いずれかの日程で、時間は午後2時からを予定。会場が確保でき次第、後日連絡する。

8 閉 会